今日のイラスト 329　「 イラストでたどる萩往還⑩ 雪の一升谷」　　古谷眞之助

イラストでたどる萩往還 10　雪の一升谷

文・イラスト＝古谷眞之助

雪の一升谷を歩く萩往還語り部のシーンを描いてみた。明木の街からは茶屋川の渓流沿いにひたすら上りが続く。かつて旅人がキツイ上りに耐えるために煎り豆を食べながら進んでいくと、峠までに一升の豆を食い尽くしてしまったということからその名が付いたと言われている。

この谷は爽やかな渓流沿いの山歩きが楽しめることと、萩往還の特徴の一つである「石畳」が当時のままの状態で残っている（一部は復元）ことが最大の魅力である。お勧めはやはり春秋のシーズンだが、このような冬の一升谷もまた一興と言えるだろう。途中に萩の盗賊が盗んだ千両箱が今も残ると伝わる「金が浴」と呼ばれる小谷があるのも楽しい。

　このシリーズもいよいよ 10 回目を迎えた。今回のイラストは語り部の友人・柴崎さんの写真をもとに描いているので、まずはそのことをお断りしておきたい。柴崎さんは様々な写真展で入選実績のある語り部の会一のカメラマンであり、過去何度かイラスト用に写真をお借りしたことがある。

　さて、今年の暖冬はいよいよ本物のようで、海外に行っているうちに一度くらいは山口でも雪が降るだろうと思っていたのに、まだ今シーズンはゼロである。敢えてこのイラストを１月に持ってきたのに少々当てが外れてしまったが、雪が降れば、萩地区では当然山口市内より深く積もる。柴崎さんをガイドにご指名されるお客様の中には「雪が積もったら連絡してくれ」と言われる方がおられる由。もちろん雪景色の萩往還の写真撮影が目的なのである。そんな柴崎さんは、ずっと以前に萩往還撮影案内ガイドという企画を打ち上げたが、それほどの反響は無かった。私もスケッチガイドという企画を提案したが、こちらは箸にも棒にもかからなかった。柴崎さんの企画は明治維新 150 年の一昨年、語り部の会主催事業の一つ「萩往還写真展」という形で実現し、多くの応募者があった。一方私の企画はちょっと無理だろうと諦めていたところ、地元ミニコミ紙「サンデー山口」から連載のお話をいただき、少し違った形で日の目を見たのである。あと 26 回も続くが、好きなイラストに加えて、萩往還に関することを気ままに書いて良い、とのことで、苦になるどころか、月一回の投稿をとても楽しみにして描き、書いている。実にありがたいことである。予定では、記事中にある地図の赤丸が萩市と山口市の市境に移動するのは今年の秋頃の予定でいる。全 36 回のうち半分近くが萩市エリアになってしまうが、何せ「萩往還」という街道名なのだから、それはまぁ、仕方ないというところだろうか。（ 2020.1.29 記 ）